2023年2月26日  川越教会  　　　　　　　　　　　　　　　　　　　丸山　勉

私のために喜ぶ方

［ルカによる福音書15章1～10節］

徴税人や罪人が皆、話を聞こうとしてイエスに近寄って来た。すると、ファリサイ派の人々や律法学者たちは、「この人は罪人たちを迎えて、食事まで一緒にしている」と不平を言いだした。そこで、イエスは次のたとえを話された。「あなたがたの中に、百匹の羊を持っている人がいて、その一匹を見失ったとすれば、九十九匹を野原に残して、見失った一匹を見つけ出すまで捜し回らないだろうか。そして、見つけたら、喜んでその羊を担いで、家に帰り、友達や近所の人々を呼び集めて、『見失った羊を見つけたので、一緒に喜んでください』と言うであろう。言っておくが、このように、悔い改める一人の罪人については、悔い改める必要のない九十九人の正しい人についてよりも大きな喜びが天にある。」「あるいは、ドラクメ銀貨を十枚持っている女がいて、その一枚を無くしたとすれば、ともし火をつけ、家を掃き、見つけるまで念を入れて捜さないだろうか。そして、見つけたら、友達や近所の女たちを呼び集めて、『無くした銀貨を見つけましたから、一緒に喜んでください』と言うであろう。言っておくが、このように、一人の罪人が悔い改めれば、神の天使たちの間に喜びがある。」

［1］　私をさがす「光」

先ほどご一緒に読んだ交読文は、詩編の139編の言葉からですが、よくこれは神様がどこにもいらっしゃるという＜神様の遍在＞を語っていると言われる詩編です。7節から10節の部分にはこのようにありました。

「どこに行けば　あなたの霊から離れることができよう。

どこに逃れれば、御顔を避けることができよう。 

天に登ろうとも、あなたはそこにいまし  
陰府に身を横たえようとも 見よ、あなたはそこにいます。 

曙の翼を駆って海のかなたに行き着こうとも あなたはそこにもいまし  
御手をもってわたしを導き 右の御手をもってわたしをとらえてくださる。 

わたしは言う。

「闇の中でも主はわたしを見ておられる。夜も光がわたしを照らし出す。」

スケールの大きな詩だと思います。ある人は「宇宙的なキリスト」がここで語られていると言う人もいます。私も確かにそうなのかも知れない、と思います。このキリストの光は、私たちがどこにいても、またどんな時にも離れることはないのだ、と語ってくれているように思います。しかしこの言葉は、ただスケールが大きいだけではないと思います。ただ大雑把にその光を輝かすというのではなく、とても注意深く、また細やかな光、私たち一人ひとりを「捜し出す」光だと思います。10節の言葉は良いですね。「闇の中でも主はわたしを見ておられる。夜も光がわたしを照らし出す。」と。サーチライトのようではないでしょうか。まるで夜になっても発見されない人がいたとして、捜し出す人がランタンや松明、懐中電灯の光と共に、声をかけながら捜し出していくような光景を思い浮べます。

今日の聖書箇所であるルカ福音書15章1～10節までの主イエス様の譬え話は、皆さんもよくご存じの譬え話だと思います。この主の言葉でどれだけ多くの人々が深く慰められ、また、神様の救いというものをご自分のこととして聴いてきたことかと思います。解説のようなものは不要であるとさえ思います。しかし、やはり聖書というのは汲めども尽きない泉のようなものですね。或いはプリズムのように、角度を変えてみたり、自分の人生体験を重ねる中でも、また違う光が私たちに向かって届いてくるように思います。

　皆さんはこの譬え話の中で、どういう点が最も心に留まるでしょうか。出来れば私だけが一方的に語るのではなくて、皆さんとご一緒に分かち合いたいと思います。まあ礼拝の中ではそれもなかなか難しいかも知れませんが、是非、聞いておしまいではなく、心に波紋が広がってゆくといいな、「分かった」ではなく、「問い」が続いて行くといいなと思います。

　私自身は、イエス様がここで「大きな喜びが天にある」と仰っている、この「喜び」ということに思いが留まりました。この「喜び」とはどういう喜びだろう、と考えさせられたんです。

[2] 「天の喜び」のただひとつの理由

　はじめは見失った一匹の羊が見いだされたという譬え話、その次は、女性が大切にしていた銀貨の内の一枚が消えてしまったのですが、それを見つけることが出来たという話です。どちらにも強調されている要素がふたつ有ると思います。一つは、「見つけ出すまで捜しまわる」とか、「ともし火を付け、家を掃き、見つけるまで念を入れて捜す」といった、決してあきらめない姿勢、ということがありますよね。途中で放ることをしない。またもう一つの特徴は、見つけ出した時の「喜び」というものが尋常ではないということです。5節には「そして、見つけたら、喜んでその羊を担いで、家に帰り、友達や近所の人々を呼び集めて、『見失った羊を見つけたので、一緒に喜んでください』と言うであろう。」とあります。また9節には「そして、見つけたら、友達や近所の女たちを呼び集めて、『無くした銀貨を見つけましたから、一緒に喜んでください』と言うであろう。」とあります。自分一人の喜びにとどめておくことが出来ない。一緒に喜んで欲しい！と人をわざわざ集めるんです。そしてお祝いをする。祝宴です。お金だってかかるでしょう。冷静に考えると元通りに戻っただけなのに、お祝いをする。いや、したいんです。そしてイエス様はこれが神の国で起こること、起こっていることなんだと仰っているんです。神の国のソロバンは、地上のソロバンとは違うもののようです。

　なんで、こんなに喜んでいるのでしょうか？普通ではない喜びです。その理由は、私は一つだと思います。いなくなったこと、失ったことが本当に悲しかったからだと思います。「まだ99匹いるよ」「また9枚あるじゃないか」と他人は言うかもしれない。そしてそのように割り切ってしまった方が、切り替えて前に進むことが出来るのかもしれない。しかし、そう出来ない。どうしてか。一匹の羊の存在と私は一つだから。一枚の銀貨の存在が失われることは、私の一部が失われることに等しいことだからだと思います。「見つけ出すまで捜し回る」というのは、執念というよりも、悲しみの深さ、悲しみの大きさを感じさせる言葉です。もし「まだ残っているものがあるじゃないか」と言ったとして…それは持ち主にとって残酷な言葉です。たとえペットでも、或いはモノでも、‟私の一部”と言える動物やモノはあるでしょう。そうじゃないでしょうか。…増してや、神様にとって、私たち一人ひとりはそういう存在です。替りがない。そう、かけがえがないのです。

[3] あなたを「連れ戻す」

しかし、人間の方が、その神様の心が分かりません。羊は迷子になって危ない場所に行っていて、危機一髪助けられた、という考えもありますが、いや、案外のほほんとしていたかも知れませんよね。増してや暗い部屋の中に中に転がった銀貨は、永遠に発見されないままになってしまったかも知れません。これが私たちですね。自分では方向転換が出来ないのです。しかし、それこそサーチライトの光を灯して、見つけ出すまで捜されるお方がいらっしゃるのです。聖書は、見出された者より、見出した者の喜びの方が大きいことを語っています。

「捜す」。これはありとあらゆることを犠牲にしないと出来ないと思います。見つかる保証がどこにありますか？ないんです。それはとても苦しいことだと思います。私たちだったらどこかで断念してしまいすです。そう、体力も金力も時間も、生活を全部犠牲にして初めて「見つけ出すまで探し回る」ことが出来るのだと思います。愚かにならなければ、また、愛がなければ出来ません。しかし神様はそれをして下さいました！それが十字架です。主は十字架で私たち罪人をしっかりと連れ戻して下さったのです。エレミヤ書29章10節はこう語っています。―「主はこう言われる。バビロンに七十年の時が満ちたなら、わたしはあなたたちを顧みる。わたしは恵みの約束を果たし、あなたたちをこの地に連れ戻す。」良い言葉です。「連れ戻す」と言うからには元の場所があるんです。それはどこ？神の国、私たちのまことの羊飼いのふところではないでしょうか。そこでは、私たち罪人の帰還を本当に喜んでくれる神の喜び、「天の喜び」が、溢れているのだと思います。

最後に、昨日思わず作った下手な詩を朗読してお祈り致します。（「さがし人」）

***「大きな喜びが天にある」とイエスさまは語られた***

***そう、これは「天」の物語だ***

***見失った一匹の羊を見つけた時***

***消えてしまった銀貨を発見した時***

***見つけられた時、羊の気持ちはどうだったのかな***

***嬉しかったかもしれない　恥ずかしかったかもしれない***

***それともきょとんとしていたかな***

***銀貨は何も思わない　思えない***

***でも　さがす方は大変だ***

***かならず見つかるなどと誰が言い切れる***

***「見つけ出すまで探し回る」と言い切るこのさがし人（びと）は***

***苦しむことを自分の生活にした***

***一匹の羊も、一枚の銀貨も、ずっとこの人の一部だったのだ***

***だから　彼らをかならず連れ戻す***

***かならず…***

***大きな喜びとは、苦しみ抜いた方が知る喜び***

***「死んでいたのに生き返った」という　途方もない喜び***

お祈り致します。

神様、あなたは私たちの存在を、こんなに自己本位な者ですのに喜んで下さいます。主イエス・キリストを私たちに与えるほどに愛して下さっています。その愛をもっともっと教えて下さい。そしてそのあなたを仰ぎながら生きて行く人生の豊かさ、確かさ、喜びを与えて下さい。共にあなたの喜び、天の喜びの中に生きて行く群れとして、私たちの教会も、これからもあなたのご真実の中に導いて下さい。主イエス・キリストの御名によって祈ります。アーメン。